ボランティア情報　平成27年6月1日発行　第三種郵便物認可

平成27年6月1日発行 毎月1回1日発行　発行所　社会福祉法人全国社会福祉協議会　昭和52年11月12日第三種郵便物認可

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

2015
No.457

ボランティア情報 6

TSUBOMI
復興のつぼみ

岩手県大槌町

ままりば
代表
小川（おがわ）　麻里子（まりこ）さん

憩いの場を提供し、子育てママを応援

東日本大震災の翌月の4月に、小川さんは3人目のお子さんを出産した。

「無事に生まれてくれてとてもうれしかったのですが、被災地の大槌で、わが子を元気に育てることができるだろうか、という大きな不安もありました」と小川さんは当時を振り返る。

「心が休まる場所がほしい。笑顔で子育てがしたい」―そんな思いが「ままりば」立ち上げのきっかけとなった。

「ままりば」とは、「ママのたまり場」と英語のリバティー（自由）を重ね合わせたもの。子育てをするお母さんたちに、ホッと一息つける場所、情報交換をしながらリフレッシュできる場所を提供したい、という思いを込めて小川さんが付けた。

活動内容は、フラワーアレンジメント教室やハーブ教室の開催のほか、美容師として働く小川さんご自身が、エステやリラクゼーション（マッサージ）なども行い、ママたちはもちろん、地元の人々の癒しの場となっている。月1回の活動ペースだが、サロンにママたちが集まると笑い声が響き、活気づく。

「時間に追われるお母さんたちが楽しみを見つけ、心にゆとりができることが大切だと思います。お母さんが笑顔で過ごすことができれば、子どもや家族も安心して幸せに暮らすことができる。次の世代を担う子どもたちのためにも、大槌が心豊かに子育てできる町になってほしい」と小川さん。生活に根ざした視点で、母と子の笑顔が広がるような活動を継続していきたいと語ってくれた。

Contents

6月号 特集テーマ　保護観察対象者への社会貢献活動と社会復帰や立ち直りを支える可能性

06 災害ボラセン運営の現場
被災経験、課題とこれから

07 ボラセンそもそもヒストリー
第3回
Vの潮流を走らせた「善意銀行」

07 団体を応援するために知っておきたい助成金のキホン
第3回
クーラーが壊れたからクーラーがほしい

08 ・保険のひろば
・ボラフェスふくしま番外編
・INFORMATION
・事務局だより

保護観察対象者への社会貢献活動と社会復帰や立ち直りを支える可能性

保護観察対象者に、地域社会に役立つ活動を一定期間に複数回行わせることを通じて、自己有用感・規範意識・社会性の向上を促し、再犯防止と改善更生を図ろうとする取り組みが、保護観察の新たな処遇方法の一つとしてスタートしました。

これまでの例では、薬物を使用した人に専門的処遇プログラムを受けること等が特別遵守事項となることがありましたが、平成25年６月、特別遵守事項の一つに社会貢献活動を加えることなどを内容とする更生保護法の一部改正が行われ、平成27年６月までに施行されることとなりました。

これに先立ち、保護観察所では、平成23年４月から、適切な活動場所の確保や処遇効果を高めるための実施方法のノウハウを蓄積することなどを目的として、保護観察対象者の同意に基づく社会貢献活動の先行実施をしてきています。

活動を通じて、社会の役に立つ体験をすることや様々な人との関わりを持つことは「自己有用感」や「規範意識」を育てます。ボランティアセンターが、彼らの活動や活動場所をコーディネートすることで、保護観察者と社会の垣根を低くし、誰もが排除されない共生文化の創造に資することが、今、期待されています。

イベント・助成金情報

公益財団法人 損保ジャパン日本興亜福祉財団　障害者の福祉活動を行う団体に対する「自動車購入費助成」の募集について
応募期間：平成27年6月1日(月)～7月15日(水)17時まで 詳細・お申込みは　http://www.sjnkwf.org/jyosei/jidousya.html

ボランティア情報 特集 FEATURE ARTICLES

事例1

再非行・再犯をしないで社会で暮らしていく そのための協力が、いま、求められています

日本BBS連盟 事務局長
大田区保護司会 保護司
長谷川 正光さん

日本BBS連盟

BBS（Big Brothers and Sisters Movement）は、非行を初め社会的適応に悩む少年少女たちに、同世代の、いわば兄や姉のような存在として、一緒に悩み、一緒に学び、一緒に楽しむボランティア活動。

全国で約4500人のBBS会員が、それぞれの地域で少年少女たちとの交流や非行のない社会環境作りのための活動に 取り組んでいる。

活動例：
ともだち活動
グループワーク
社会参加活動への参加協力
非行防止活動（非行のない社会環境作り）

少年少女と一緒に悩み、学び、楽しむＢＢＳ活動

ＢＢＳ運動は1904年にアメリカで始まり、日本では1947年に始まったといわれています。戦後の混乱期に、住む所も食べるものもない子どもたちが困窮から盗みを繰り返す。この惨状をみかねた一人の学生の投書が少年審判所（現・家庭裁判所）の当時の所長の目に触れ、その学生にアメリカのＢＢＳを紹介し、学生たちが呼びかけ「京都少年保護学生連盟」が結成されました。その後、活動が全国に広がり、1952年に「日本ＢＢＳ連盟」の名称となり、約70年近い活動をしてきました。現在、ＢＢＳ会員は約4500人。

海岸清掃（留萌BBS会）

そのうちの４割・約1800人が大学生です。※1

ＢＢＳを特徴づける運動の一つとして「ともだち活動」があります。非行をした少年少女たち（以下、少年たち）や多様な悩みを抱えている子どもに対して、ＢＢＳ会員が「ともだち」としてふれあうことを通して自立を支援する運動です。

「ともだち活動」は多様な機関からの依頼で行います。2014年度は200件の依頼があり、そのうちの約半数が保護観察所からの依頼であり、保護観察を受けている少年たちと一緒に活動しました。

年齢の近いお兄さんお姉さん的な身近な存在のＢＢＳ会員が少年たちと一対一で関わり、一緒に話し合いをしたり、相談相手になったりします。そうして、関わり合うことによって、少年たちが「自分とは違う生き方をしている若い人がいるんだな。こういう生き方や考え方があるんだな」と気づき、立ち直るための“よい栄養”になることがよくあります。

八王子学生BBS会員

その他にも、児童相談所、少年補導センター、家庭裁判所、学校等からの依頼により「ともだち活動」を行っています。例えば、学校からの依頼で、ひきこもり状態の子どもと一緒に活動しています。子どもとＢＢＳ会員が関わり合うなかで、子どもが人と話すようになった、家から出るようになったということがありますね。

児童相談所、児童養護施設、児童自立支援施設、更生保護施設等を定期的に訪問して、一緒に遊んだり、学習支援もしています。

書籍紹介
『月刊福祉　2015年7月号』特集：認知症をどう支えるか
（全社協出版部受注センターTEL:049-257-1080 FAX:049-257-3111 E-mail:zenshakyo-s@shakyo.or.jp 定価971円・税別）

社会貢献活動に協力

社会貢献活動の実施は各地の保護観察所が行い、活動ごとに指名された保護観察官、保護司が準備から実施に携わっていきます。また、保護観察所からの依頼を受けて、ＢＢＳや更生保護女性会等の協力団体が活動に協力しているのです。

社会貢献活動で対象者が地域に入って地域の人たちと一緒に活動する。そのときに、地域の人たちが非行や触法ということに慣れていないことがありますが、ＢＢＳはこれまでの活動の中で培った経験や、ノウハウに期待があるのではないかと感じています。ＢＢＳでは試行的な活動から協力を続けています。

援農作業風景（八王子学生BBS会員）

社会貢献活動の試行的な取り組みが各地で始まっている

2013年６月の改正更生保護法公布後、各地で社会貢献活動の試行的な取り組みが始まりました。対象者や活動の内容は保護観察所が決めます。ＢＢＳの場合、活動が決まると、協力依頼が来て、参加できるＢＢＳ会員が社会貢献活動に参加しています。

対象者が①地域や公共施設の清掃活動に参加する、②福祉施設で清掃・介護補助を行う、③地域のボランティア活動に参加する。これまで行われた試行的な活動では、このようなプログラムが多いですね。

社会に寄与できる体験をすることは少年たちにとって大きなことでしょうね。人に迷惑をかけてきた。いつも叱られていた。「自分は役に立たない人間なんだ」という否定的な気持ちでいた。それが、社会貢献活動をすることによって、まわりの人たちから評価される。ほめられる。少年にとって非常にうれしいことだと思います。「自分もこうやって社会の役に立つことができるんだ！」と思える。更生意欲につながっていくこともあるでしょう。

対象者は保護観察所が選定していますが、コミュニケーションがうまくとれない、ひきこもっているということから、本人に社会性や規範意識を身につけてもらいたいという意図から対象になることもあるわけです。社会貢献活動は１つの教育プラグラムなのです。

実際に知的障害者施設で社会貢献活動を行った保護観察中の少年の中で、「また、活動をやりたい」と一緒に活動した保護司に話す少年たちもいました。

誰もが社会のなかで健全に暮らしていくそのために

非行・触法した人が再非行・再犯しないで、社会のなかで健全な生活をしていけることが重要です。社会にとっても有益なことです。

そのために、保護観察所と地元の保護司会が社会貢献活動の協力先を開拓しています。地域に根ざしている保護司が、地元の福祉施設、学校、町内会、地域の団体に出向いて話をしている状況です。これまでの試行的な活動で、福祉施設等の受け入れ先から歓迎されていると感じています。

多くの方の力が必要だと思っています。「活動場所として協力しますよ」といってくれるところがたくさんできると嬉しいですね。ボランティアセンターがその担い手になってくれることを期待しています。

ＢＢＳ運動は少年たちに対して一方的にするものではなく、ボランティアとして参加しているＢＢＳ会員自身の成長にも期待しています。多くの若者と一緒に活動していきたいですね。

2014年度のBBS会員の社会貢献活動（試行的な活動）
107回の活動に、延べ355人のBBS会員が参加している。

※1　BBSの組織：地区BBS会～市町村などの行政区域や大学などを単位に全国に約500会。都道府県BBS連盟～都道府県（北海道においては札幌、函館、旭川、釧路）ごとに全国に50連盟。地方BBS連盟～全国8地方連盟（関東、近畿、中部、中国、九州、東北、北海道、四国）。
日本BBS連盟は、東京にあり、各BBS組織相互の連絡、活動に関する指導助言など、BBS運動全体を統括しています。

イベント・助成金情報
第18回「まちかどのフィランソロピスト賞」／第6回「青少年フィランソロピスト賞」応募受付中　主催：公益社団法人日本フィランソロピー協会
締切：2015年7月17日（金）消印有効　詳細は http://www.philanthropy.or.jp/　「日本フィランソロピー協会ホームページ」→「顕彰事業」

ボランティア情報 特集 FEATURE ARTICLES 事例2

自然な社会貢献活動を推進するために

社会福祉法人　函館市民生事業協会
救護施設　明和園　施設長
本田　英孝さん

社会福祉法人　函館市民生事業協会　救護施設　明和園

函館市民生事業協会は、昭和８年に北海道方面委員会の補助機関として「函館方面事業助成協会」としてスタートする。

「明和園」は、戦後の戦災者や引揚者への住宅（寮）の提供を当初行っていた函館市同胞援護会の解散を受け、昭和25年４月に函館市から更生施設「函館民生寮」（大川町無料宿泊所）として委託された。昭和48年３月に更生施設を廃止され救護施設「明和園」（定員84名）として、現在に至る。

救護施設として、保護司としての社会貢献活動への思い

明和園は生活保護の適用を受けた方が入所される救護施設です。生活保護を利用して地域で生活する人も多くいらっしゃいますが、入所されてくる方は日々の介護を要する状態や一人での生活が難しいなど、様々な課題や背景をもった方です。その中には罪を犯し保護観察を受けている方もいます。施設での生活から、自立して地域で生活することを考えた時、地域の方と保護観察を受けている方が共に歩んでいける関係をつくるきっかけが必要です。そこで明和園では、2012年から保護観察所の依頼に基づき社会貢献活動の先行実施に協力していますが、この活動を進めていくことは救護施設の使命の一つとも考えています。

また、私は保護司としても活動しています。その部分でも、保護観察を受けている方の社会貢献活動を地域と共に行い、これから生活していく地域の中で感謝をされる体験や自身を肯定してもらう経験を積むことは必要だと考えています。

日々の活動があってこそ、地域に受け入れてもらえる

社会貢献活動は2015年６月から正式にスタートするわけですが、何も土台がないところから始めようとしても、難しいのではないかと思います。

明和園は以前から、地域の方が集まる場所として施設を開放したり、施設のお祭りに招待するなど、地域に開かれた施設を目指してきました。例えば、施設のお祭りには700人を超える関係者や地域の方に参加いただき、一部の方にはボランティアとしても協力いただきました。その中で、保護観察を受けている方も、模擬店で一緒に作業するなど交流の機会を作っています。

また、地域の方にこの活動の目的などをきちんと説明して理解を得てきました。

こうした日々の活動を積み重ねてきたから、地域の方と一緒に活動する空気ができています。

個人情報の壁

この活動は保護観察を受けている方たちが、社会の役に立つ体験を通じて，人の役に立てるという感情や社会のルールを守る意識を育み、地域に貢献することを通じて立ち直ることを目的としています。そのため、地域の方々にも参加者の背景や今の姿を知ってもらうことが必要だと考えます。

しかし、本人の同意がない限り、秘密保持の義務が保護司にはあります。そのため、保護司やその関係者だけの活動になってしまい、地域に社会貢献活動の趣旨や必要性を理解し、共感してもらうことが難しくなっているとも感じています。

これから社会貢献活動を展開しようと考えている方へ

これから本格的に活動が始まる中で、社協のボランティアセンターやNPOにも活動場所や機会の紹介を依頼することもあると思います。その時は保護司も一緒に参加して安全面や必要な配慮に協力しますので、相談を受けた際は、特に犯罪者であるとか、その人を更生させるという意識ではなく、地域で活動したい人がいると考えていただきたいです。

最初は参加者と地域の方の間に壁があるかもしれませんが、様々な事情を抱えた人が、人間関係や居場所づくりとして、地域に自然に入っていける環境づくりをしていただければと思います。

書籍紹介
『概説　社会福祉協議会』（全社協　出版部）価格2700円・税込・送料別　お申し込みは　049-257-1080（全社協出版部受注センター）または https://www.fukushinohon.gr.jp/　（福祉の本出版目録ホームページ）まで

災害ボラセン運営の現場

今後も多発することが想定される災害。今だからこそ知りたい災害ボラセンの設置・運営にあたっての基本的な考え方を、災害支援の経験豊富なひのぼらねっと・山下さんが対談形式で毎回ご紹介します。

滋賀県高島市社会福祉協議会事務局長
井岡（いおか） 仁志（ひとし） さん

広告制作、FMラジオ局の仕事を経て、30代で滋賀県朽木村に移住。木こり生活を経験後2003年に朽木村社協に入職。2005年合併に伴い高島市社協職員として地域福祉・ボランティアセンター担当を経て2015年4月から現職。

日野ボランティア・ネットワーク
山下（やました） 弘彦（ひろひこ） さん

2000年、旅の途中で鳥取県西部地震に遭遇し、日野町でボランティア活動。被災後の地域づくり活動を継続している。県内外で防減災や支え合いの取り組み支援を行い、災害時には社協やNPOなどのネットワークをいかして支援にあたる。

被災経験、課題とこれから

高島市社協へお邪魔してきました

2005年、高島郡5町1村が合併して高島市が誕生した
2013年台風18号による被害状況：9月16日午前3時・午前4時5分に市内の4圏域（旧町村域）へ避難勧告を発令。5時頃に鴨川が決壊した。浸水被害は広域で発生した。床上浸水109世帯（このうち約90%が高島地域に集中）。山間部では土砂災害も随所に発生した。
災害VC設置：9月18日（水）ボランティア募集、活動開始。被害の大きい旧高島町南鴨地区と、距離の離れた朽木地域にサテライトを設置。

台風18号、災害対応の課題

山下　台風18号の災害対応で、課題となったことはありますか。

井岡　一番感じているのは、要援護者支援の動きが十分できなかったことです。障がい者自立支援協議会でも、災害後の振り返りにおいて、そういった意見が多く出たのですが、災害VCでも要援護者支援班のようなものを作れなかったし、障害のある人の状況を十分把握できていませんでした。市内の福祉関係の全事業所に、「自分たちだけで対応が困難なことや、手伝って欲しいことがあれば社協、災害VCに気軽に言って」とFAXを流したり、住民に「被害があろうがなかろうが困ったことがあったら言ってください」と声をかけたりすればよかったと思っています。

山下　当時、そうした対応が抜け落ちたのは何故でしょうか。

井岡　被害は局所的に点在していましたが、被害の大小にかかわらず、社協の担当ワーカーが各被災地域に足を運びましたし、自治会役員さんや民生委員さんともつながっていたので、要援護者の方も含めて支援の取りこぼしはないだろうと思い込んでいたように思います。

山下　ふだん取り組まれている見守りネットワークはどのように機能したのですか。

井岡　夜中に避難勧告が出ましたが、日ごろ見守りで関わっている人に落ち着いて声をかけて、安全に避難することができた、という声もありました。災害時にも目が届いて、見守りネットワークの取り組みをしていて本当によかったと思います。しかし、そこから漏れている人や、避難勧告が出た地域でも見守りネットワークの活動ができていないところもありました。また、市社協の障害者支援事業所職員が声かけに行くと避難できていなかったケースなどもあったようです。

山下　これまで他の被災地で災害VCの運営支援者としての経験を多く積んでいても、いざ当事者（運営者）となると違いましたか。

井岡　災害VCの運営者は支援の総合的なマネジメントをしないといけません。ふだん関わりのある地域だからこそ、様々なしがらみもあります。いろいろな方法論の中でどれを選択したらいいか悩むこともあります。職員の疲弊もあります。

　そうした状況で、外部からの運営支援者のような、後押しをしてくれたり、客観的な助言をしてくれたりする存在はありがたいです。ここは大丈夫だろうと固定観念で職員が関わっていなかった地域に外部からの支援者が入り、困っていることを把握してボランティアによる支援につながったこともあり、全然違う視点を持つ、運営支援者の大切さを感じました。

山下　地域では、見守りネットワークのように地縁のつながりが重要であることに加えて、テーマ型で様々な活動団体が集まる災害ボランティア活動連絡協議会（災ボラ連協）や災害VCが多面的に関わることの意義は大きい。同様に、災害への対応にあたっては、ワーカーの動きなど高島市社協のしっかりとした体制があっても外部とのネットワークもまた重要ですね。ネットワークや支え合いの構図は重層的に必要なんだ、ということを感じます。

被災体験を踏まえて、これからの取り組みで大切なこと

山下　台風18号災害を経験して、今後どんな取り組みが重要だと考えていますか。

井岡　今回災害VCで活動した述べ2,862人のうち、半数を超える1,525人が高島市民。多くの人が災害対応を経験したことは大きいですね。

　また各地域の住民福祉協議会で防災を活動の柱に掲げているところでは、災害対応でも動いてくれました。被災後には他の住民福祉協議会でも防災に力を入れる気運が高まっているので、災ボラ連協と一緒に取り組んでいけるよう意識しています。地縁型とテーマ型のネットワークが連携することが重要だと思います。

山下　起こってほしくないことですが、もしまた大きな災害が起こったら、ということではどうですか。

井岡　台風18号では、いわゆるボランティアグループ以外にも赤十字奉仕団などが自発的に炊き出しをして被災したお宅に配ったり、いろんな動きがありました。

　ただ、災害VCに一人ひとりの住民の想いが集結してくるということが、もう少しあってもいいのかな、とも思います。社協にお伺いを立てるのではなく、「何か私にできることないの？」「私はこんなことできるよ」といったことが寄せられて役割を話し合えれば、被災した状況の中でも、もっと豊かに暮らしを支えることができるかもしれません。

　災害VCが単にボランティアを派遣するためのものではなく、住民もNPOも、関係機関や専門職も、いろんな想いを持った人が協議できるテーブルを用意したい。これは災害VCでも大事だろうし、日ごろから災害に限らずこうした取り組みを一層進めていければいいと思います。

山下　台風18号災害の経験を踏まえて、「高島では、日ごろも災害VCでもこうですよ」という理解が広がっていくといいですね。

井岡　集落の内外、市の内外で様々なネットワークを構築してしくみを機能させていくことで、今回のような局地災害だけでなく、大規模な水害や広域の地震災害が起こったときにもしっかり目を配って支え合えるのだと思います。災ボラ連協でも、大規模災害が起こったときの協働型災害VC運営について議論したいといった声が上がっているので、こうした声を大事にして議論したりシミュレーションしたり、みんなで共有していきたいですね。

自治会での防災出前講座

イベント・助成金情報
第18回全国食事サービス活動セミナーのご案内　日時：平成27年7月26日（日）
会場：ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 本社カフェテリア（東京都千代田区）
お申し込み、詳細は　http://www.mow.jp/pdf/20150726mowseminar.pdf　※定員100名（申込先着順）

ボラセンそもそもヒストリー 第3回

関西学院大学　人間福祉学部　助教
岩本（いわもと）　裕子（ゆうこ）さん

大阪市社協と区社協でボラセンコーディネーターを20年近く経験し、その後研究者の道へ。そんなこんなで、ボラセンを愛してやまない大阪のおばちゃんです。

1960年代ー①
1960年代はまさに、現代につながるVセンターの源流があちこちで産声をあげた、ベビーラッシュ。まずは善意銀行からです。

Vの潮流を走らせた「善意銀行」

銭湯で生まれた善意銀行

「善意銀行」＝「社協が行う金品の寄付システム」と思っていませんか。しかしもともとは、金品だけでなく労力・知識、つまり人=V（ボランティア）のコーディネートも含めたものでした。

1961年徳島県で開かれた「Vの集い」では、「善意をもっている人はいっぱいいる。社協といっても一般住民にはよくわからない。誰もがよくわかって気軽に行ける窓口をつくれ」という意見が出されました。同じ頃、当時徳島県社協の職員で、「心配事相談」と「V普及活動」の両方を担当していた木谷宣弘も、双方の思いをうまく繋げる方法を模索していました。そんな彼が、銭湯で銀行員の旧友と、話をしているうちにこのシステムを思いつき、小松島市善意銀行が支店第一号として1962年に発足しました。当時まだVということばが一般的になっていなかったことから「V」ではなく「善意」としたそうです。銀行を模して、「労力・知識・技術・金品」の各口座を設けて人々の善意を登録(預託)し、払い出すというもので、これにより、多くのV活動が展開、組織化されました。

ここで驚くのは、その財源を銀行が寄付や広告料で拠出したということです。民間との協働は、まさに現代の社協ボラセンの課題ですよね。また、銀行と命名していることや、金銭の預託が共同募金との関係で法に触れるのではということで、2回も喚問を受けたそうです。現代では至る所で展開されている募金活動も、当時は一般的ではなく、そういう意味でも善意銀行は先駆的でした。ちなみに、最初の活動は、老人ホームでの理髪と音楽演奏だったそうです。

Vの潮流巻き起こる

善意銀行は、全国にネットワークをもつ社協が発端になったこともあり、あっという間に広がり、翌年の1963年では511カ所、ピーク時の1974年には1250カ所を超えました。

ここでもう一点、特筆すべきは、このうち19カ所は、実は社協ではなかったということです。例えば翌年(1963年)に早くも富山県善意銀行が、その後豊橋、東京(当初は善意協会、後に東京都社協に移管)、中部というように、社協の存在がまだ弱く支援体制も十分でないなか、民意で自発的に立ち上がり、今も活動を続けています。

いずれにしても、一般住民の参加の道を開き「Vの潮流を行き渡らせた」善意銀行と、その創始者である木谷の功績は非常に大きいと言えます。

次なる課題

木谷(2001)は、善意銀行の課題として、①福祉教育・福祉学習、②グループ間連携、ネットワーク化、③銀行というネーミングと金品以外の調整の即応の難しさから、金品預託が中心となっていったこと等を挙げ、これらの解決には、専任のコーディネーターや、体制の整備等が必要であることを指摘しています。このことがその後に活かされていくことになります。

主な参考文献

木谷宣弘『ボランティア物語3　ボランティアの渦』2001,筒井書房
大阪ボランティア協会ボランタリズム研究所『日本ボランティア・NPO・市民活動年表』2014,明石書店

団体を応援するために 知っておきたい助成金のキホン

助成金の応募や、活用のために押さえておきたいポイントを毎月わかりやすく教えていただきます。

第3回　クーラーが壊れたからクーラーがほしい

ボラセンを担当していた時代に、実際にあった話です。中途障害の方たちが通うある作業所のスタッフが「壊れたクーラーを買い直すための助成金応募書を書いたので提出前に見てほしい」とボラセンにやってきました。極端に要約すると、こんな応募書でした。「クーラーが壊れた。買い直すお金がない。助成金ください」。

元々よく知っている団体だったので、考えられる状況について質問をしながら応募書を練り直しました。それを要約するとこうなります。「クーラーが壊れた。細かい作業をしているので窓も開けられない。体温調整のできない利用者は通うことができなくなる。助成金でクーラーを購入し、利用者の社会参加を保障したい」。

応募を受け付ける立場になってたくさんの応募書を読んでいると感じますが、団体のみなさんは本当に正直です。「お金がないから助成してください」。シンプルです。でも、それだと「助成しましょう」とは言いづらいのです。助成金で購入したいと思っている備品がないことで、どんな困ったことが起きているのか、助成するとそれがどんな風に解決するのか。地域でどんな困ったことがあるから応募している活動が必要で、助成して活動ができるとどうなるのか。読んでいて「なるほど」と思える理由付けが必要です。

「地域のつながりを作ります」という応募内容で、経費が「パソコン3台」となると審査委員の頭には「?」が飛びます。「助成金を活用するとどんないいことがあるのか」という視点とともに、「活動内容と経費がぱっと見てつながるかどうか」。この視点でも団体の応募書を一緒に考えてみてください。

※冒頭の作業所の応募は無事に採用され、クーラーを買い換えることができました。

中央共同募金会
企画広報部
城（じょう）　千聡（ちさと）さん

2003年から都内社会福祉協議会でボランティアコーディネーターとして勤務。2011年4月より現職。現在は主に東日本大震災の被災地で活動するNPOなどを支える「災害ボランティア・NPO活動サポート募金（ボラサポ）」の助成金を担当し、これまでに4300件以上の応募書を読む。ボラサポ公式Facebookページで情報発信中。

イベント・助成金情報

「東日本大震災に関する書類・写真・動画の整理・保存講習会」開催のお知らせ
日時：平成27年7月27日（月）13時30分～17時　会場：仙台市情報・産業プラザ(AER(アエル)6階) セミナールーム(2)B(宮城県仙台市)　詳細は　http://kn.ndl.go.jp/information/380　（国立国会図書館東日本大震災アーカイブ）

ボランティア情報 2015 No.457
全国ボランティア・市民活動振興センター
〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル TEL.03-3581-4656 FAX.03-3581-7858
E-mail vc00000@shakyo.or.jp URL http://www.zcwvc.net/
発行人●渋谷篤男 編集人●佐甲学 制作●株式会社ジャパンアート 定価●￥108（購読料は会費に含む）

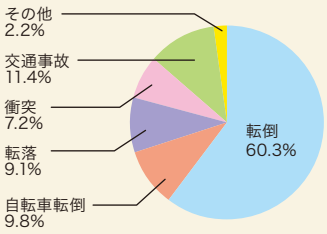
保険のひろば

ボランティア活動保険では、こんな事故が・・・

事故発生件数のうち7割以上が転倒事故

ボランティア活動保険の事故を原因別に分析すると転倒事故（自転車転倒を含む）が約7割を占めています。
屋内・屋外を問わず、転倒事故につながる危険を取り除き、事故を未然に防ぎましょう。

原因別・事故発生の割合

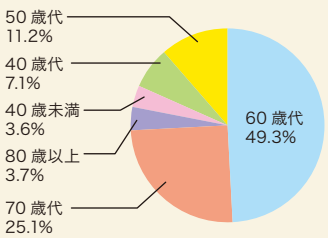


平成 25 年度ボランティア活動保険事故データ

事故発生件数のうち約8割が60歳以上の方

年代別でみると約8割が60歳以上の方で、若い世代に比べ事故が起きやすいことがわかります。
60歳以上の方の場合は後遺障害につながることも多いので、その後の日常生活に大きな影響を与えかねません。

年代別・事故発生の割合



平成 25 年度ボランティア活動保険事故データ

安全なボランティア活動のための10大ポイント

1. 転倒防止のため、日頃から体力づくりに努めましょう。
2. 足元の安全を確認する習慣をつけましょう。
3. 自転車の運転には細心の注意を払いましょう。
4. 活動当日の体調を把握しましょう。
5. 活動内容に適した服装を心がけましょう。
6. 準備運動で身体をほぐしてから活動しましょう。
7. 今の自分にできることか、見きわめながら活動しましょう。
8. 疲れを感じたら、必ず休憩しましょう。
9. 不用意に犬などの動物に近づくのはやめましょう。
10. ﾋﾔﾘとしたこと、ﾊｯとしたことはﾒﾝﾊﾞｰ内で共有しましょう。

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL http://www.fukushihoken.co.jp/

ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構成員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

ボラフェス ふくしま番外編

プレゼンター

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会委員

桜の聖母短期大学教授

池田（いけだ） 洋子（ようこ）さん

2015年の全国ボランティアフェスティバル開催地・福島。

福島のことをもっともっと知って皆さんもボラフェスふくしまに参加しましょう！

福島の復興支援、地域活性化の一翼を担っているのが学生たちです。東日本大震災後、福島県内8大学5専門学校の学生たちは被災地・避難者支援活動のために「ふくしま復興支援学生ネットワーク」を立ち上げ、今も仮設住宅を訪問しています。震災の翌年から始まった「ふくしまキッズ博」では市内4大学・短大の学生たちが子どもたちのために活動を継続しています。また、過疎地の多い福島県では大学生の力を活用して集落支援事業を展開していますが、学生たちは住民の方々と一緒に地域活性化のためにも活動しています。

学生たちの活動はフルーツ王国福島の風評被害払拭のための活動や商品開発にまで及んでいます。今年の春もりんごの花が咲き誇り、秋の収穫への期待が高まっています。職人技を持つ果樹農家の美味しいりんごを味わってください。お待ちしています。

りんごの花

全国ボランティアフェスティバルふくしまの円滑な開催、運営に資するための寄付金及び協賛広告を募集中

アドレス
https://www.facebook.com/volufesfukushima

INFORMATION

第24回 全国ボランティアフェスティバル ふくしま 絵手紙を募集しています

●テーマ：未来へつなげたい想い
●募集対象：テーマにご賛同いただける方であればどなたでも応募可能です。
●募集期間：平成27年6月1日（月）～平成27年9月30日（水）必着

応募方法及び問い合わせ先

官製はがき等に絵手紙を制作し、宛名面に名前・住所・電話番号をご記入の上、下記までご郵送ください。

福島県社会福祉協議会 全国ボランティアフェスティバルふくしま
絵手紙募集係
〒960-8141 福島県福島市渡利字七社宮111番地
TEL：024-524-2224（いきいき長寿課内）

事務局だより

4月から新しくボランティア情報の編集に携わっている星野です。「復興のつぼみ」を担当させていただいていますが、決まった文字数の中で、取材させていただいた方の魅力をどのように伝えるか、四苦八苦しています。読みやすさなども考えながら「伝える」技術を磨いていきます。（星野）